

・空に反る鋼の吊屋根の夜のひかり今聞こ
ゆ国のひとつ息つき

・耳になお歓喜のこだま国越えて※いて※
らに戦争はなく

敗戦からここまで来たという感慨が伝
わってくる。三首目の結句「戦争はなく」
に、思いは集約されるのだろう。新聞とい
う場を思えば、オリンピックを詠む歌に、
戦争の語が入っていることの意味は大きい
のではないだろうか。

前川佐美雄は「深く思へよ」と題して三
首。

・忘れぬし日本の空の美しさ萬国選手団の
上にありたる

・その国の旗かざし歩む一人を選手団のな
かに見て涙ぐむ

・式典を見て涙ぐむはづるなし世界はひと
つ深く思へよ

日本の空の美しさを忘れていた：これも
また敗戦とその後の時代を象徴する表現だ
ろう。久しぶりに顔をあげて空を見上げる
ことのできる祭典として、率直に喜んでい
る。たった一人で入場行進に参加した国（お
そらくは植民地支配から脱したアフリカ諸
国）の選手を詠んだ二首目が印象深い。日

本も、1912年、初めて参加したストッ
クホルム大会では、たった二人の選手団
だった。

一番攻めているなど感じたのは、五島美
代子の三首だ。タイトルは「黒・白・黄」。
これは肌の色を言ったものである。

・核武装よそに見て競う若き裸身 黒白黄
のいろひかりあいつつ

・魔女 天のものにはあらず地にまろび鍛
えあいたる苦闘いくとせ

・長き日をおのれに勝ちてのち得たる勝ち
のしるしのメタル見せあう

一首目は、大会期間中に中国が初の核実
験を行ったことを指している。スポーツの
祭典を通して、その期間だけでも平和をと
いうのがオリンピックの一つの思いだが、
現実には甘くない。折り紙かクレヨンによ
うに単純化された肌の色の表現は、オリ
ンピックの無邪気さをも象徴しているよう
に感じられる。

二首目は、言わずと知れた「東洋の魔女」
と呼ばれた女子バレーボールチーム。軽や
かで華やかな天女などではなく、「地にま
ろび」の泥くささが彼女たちを捉えてい
る。

三首目は、今なら珍しくないかもしれな
いが、「おのれに勝ちて」という見方は、
当時なかなか新鮮だったのではと思われ
る。国と国、選手と選手の戦いではなく、
つまるところ自分自身との闘いに勝ったも
のが残るという見方である。

さて、2020年東京オリンピックで
は、どんな言葉が紡がれるだろうか。実は
私も、古くから一緒に仕事をしている記者
とともに取材に行く予定だ。前段階とし
て、河瀬直美さんにインタビュをした。
彼女は、今回のオリンピック公式記録映画
を監督する。そのニュースが流れたときか
ら、どんな心づもりで、どんな視点から撮
るのだろうか興味があった（提案してみた
ら、すんなり企画が通った）。誰もが簡単
に映像を撮れる時代、河瀬さんは作家性を
大事に、物語を構築したいと話す。

「心の花」の一〇〇年記念号で、若手た
ちが意中のクリエイターにインタビュす
るという企画が持ち上がり、中の一人が河
瀬さんだった。あの時も、快く引き受けて
くださったなあと懐かしい。私はすでに若
手ではなかったたので、残念ながらインタ
ビュはできなかつたけれど。